《譚綴（たんこう）》

『薄（すすき）が原』

九谷（くたに）　六口（むくち）

冴えわたった寒空には心なげな細い三日月。月の周りを星が取り巻いております。灯りがなくてもなんとか歩けるほどの明るさ。

そして、何処までもつづく原っぱを薄が覆っております。見渡す限り茶色に枯れた薄の葉と白い穂ばかり。たまに冷たい風が薄を揺らし、カサカサと音を立てております。

そんな薄が原を一人の武士が力ない足取りで歩いております。体格はガッシリとしておりますが、埃まみれの着物や手入れをしていない月代、垢まみれの顔付きから、この男が長旅の途中であり疲れきっていることがわかります。すでに深夜、寝床になりそうな家もなく、雨露をしのげそうな木立もございません。薄を敷き詰め、寝床代わりにしては、と思ってはみたものの、この寒さには勝てそうにもなく、ただ歩きつづけるしかございません。ここ数日、なにも食べていない体にこの寒さはこたえます。

背中をまるめトボトボと歩いておりますと、遠くの方に小さな家のようなものが見えてまいりました。外で寝るよりはマシだろうと近づいていきます。茅葺の屋根はところどころ茅が抜け落ち、柱だけでなく家全体が傾いております。今にも壊れてしまいそうなたたずまい。

しかし、不思議な事に障子だけは、出来上がったばかりのような綺麗な形をしております。障子紙も真っ白。壊れかかった家には余りにも不釣合いな障子でございます。人気は全くありません。聞こえるのは風にそよぐ薄の音だけ。

さすがに中に入る事も出来ずしばし佇んでおります。

この男の名前は、都筑数衛門。甲津藩五十万石の勘定奉行を勤める歴とした家柄の侍でございましたが、謂れのない噂が元で脱藩し、今は諸国を旅する浪々の身でございます。

Copyright © H.Mitani

数衛門は、小さい時から体は丈夫で頭も良く、凛々(りり)しい姿は藩内でも評判でございました。文武両道に長(た)け、特に剣術では右上一刀流(うじょう)の遣い手として名を馳せております。この右上一刀流は、上段に構えた刀を右に少し傾かせた形で相手と対します。相手が踏み込んだ瞬間、右上から一刀のもとに相手を袈裟懸けに斬り倒します。刀を交(まじ)えることは殆どございません。大抵の人間は右利きですので自然、左側の防御は弱くなります。相手は、刀が自分の左首筋と肩のあたりに振り下ろされることが判りますので防御ばかりが気になり、身動きが取れなくなってしまいます。構えたままで時間が過ぎていきますが、じっとしている訳にもいきません。数衛門に踏み込まれれば斬られるのは必至。やむなく踏み込みますが一瞬の隙をつかれてしまいます。

いくら優秀であっても、家は長子が継ぎますので数衛門は部屋詰めの身。身を立てるには、他家の婿養子となるしか道はございません。文武両道に優れ、見栄えも良い数衛門ですので元服後に、いろいろな話がございましたが、私は今のままが良いのです、と興味を示しません。好きな人でも、と両親が聞きましても、別におりません、の答のみ。確かにそのようなものは居ないようでございました。

当然、周囲からは不思議がられますが当人は気にもかけていない様子であります。

二十三、四歳の頃から噂が立ち始めます。

「数衛門様は、久美様がお好きだったのよ。きっと」

久美は、数衛門より五つ年下で、屋敷は通りを挟んではす向かいにございました。幼い頃は二人で遊んだこともございます。しかし、元服後は挨拶をすることすらございませんでした。

久美は、十七歳で家老横田主計の元に嫁ぎました。主計は、美しく育っ

Copyright © H.Mitani

た久美を見た途端、強引に嫁にしてしまったのでございます。
主計は、熱心に藩政に取り組みましたので藩の財政も豊か。よく出来た家老と諸藩からの評判も良かったのでございますが、部下に限らず周りの者に有無を言わせず従わせるところがあります。こんな主計ですので、親しく語りかけてくる者はおりません。
久美の美しさは自慢のひとつでございました。久美を大切に扱います。しかし、二人でいる時にも、部下のようにあくまで礼儀正しく接し、心の底からなつかない久美に寂しさを感じておりました。
そんな折、家臣が話す噂を耳にしてしまったのでございます。

「久美殿は、数衛門を慕っているようでござる」

主計は、おどろきますが、久美についてはあらゆることについて調べております。数衛門は、幼友達。物心ついた頃からは会ってもいないはず。噂は何かの間違いにちがいない、と自分を納得させたのでございます。
しかし、日が経つにつれ、なんとなく城内の者たちの態度が変わっていくのに気付いたのでございます。噂がひろまったのでございましょうか、今までですと廊下などですれ違う時、相手は頭を下げ通り過ぎるのを待ちましたが、この頃は、チラッと上目遣いに自分を見るような雰囲気を感ずるのでございます。
主計にも思い当たる事がございます。心からなつかないのは……。
猜疑心とは恐ろしいものでございます。一旦、心に住みつきますと簡単には消えていきません。むしろ日に日に育っていくものでございます。主計のお酒の量が増えてまいります。

まさか、久美と数衛門が……。数衛門はいくら剣に優れているとは言え、部屋住みの身。わしとは身分が違う。ましてや二人は、幼い頃に遊んだだけの仲。久美が心を奪われることなどあるはずがない。下らん噂だ。この

Copyright © H.Mitani

わしが噂を気にするなど、どうかしている。
しかし、数衛門は良い婿養子の話があっても耳をかさないと言う。このままで良いと言っているようだ。
このまま……？　このままとは、どう言うことなのか。久美とは会えないが同じ城下で久美だけを心に暮らせればそれで良いと……。そんな馬鹿な。だが、久美はわしに心を開いてはいない。まさか、久美も数衛門と同じ事を考えているのか？　会えなくとも良い、誰の嫁であっても良い、数衛門だけを心に……。

そんな事が有ろうはずがない。振り切っても振り切っても、同じ事が頭に浮かんでまいります。まさかまさか、の連続でございます。

自然、藩政にも以前のような気迫が感じられなくなってまいります。廊下で人とすれ違う時、主計の方が俯き、目を合わせないようにいたします。こうなりますと、周囲の人間は、あの噂は本当なのかもしれない。主計殿も気にしているご様子。最近元気がないように見受けられる。ひょっとすると二人は密かに逢っているのでは。などと囁き合う始末でございます。

酒をしたたか呑んだある夜、主計は居ても立ってもいられず久美に聞いてしまいます。
「数衛門に逢っているのか」

久美が驚くのも当然でございます。話をしたのは幼い頃のみ、もう十数年お顔を拝見した事もございません、と答えます。
この夜は、これで治まりましたが、お酒を呑みますと主計は、同じ事を久美に聞きます。久美の答えはいつも同じでございます。日を追って主計の問いかけは詰問に変わってまいりますが、事実、数衛門と逢ってなどい

Copyright © H.Mitani

ない久美は、冷静にいつもと同じ答えをいたします。
同じ詰問に対し判で押したような同じ答え。これが返って猜疑心を煽(あお)ります。猜疑心とは、そう言うものでございます。嫁いだあと、久美は広大な家老屋敷から外に出たことはございません。主計にも判っているはず。しかし、悪い事に繰り返し湧き出てくる猜疑心は、その人間の理性を壊してしまいます。そして単なる疑いを事実へと変化させてしまいます。主計にとり、久美と数衛門が逢っていることは事実となってしまったのでございます。

ある夜、主計は、いつものように久美を詰問いたします。いつもと同じ事の繰り返しでございます。
床についた久美の寝屋に、酒を呑み醜く浮腫(むく)んだ顔の主計がやってまいります。主計は体を求めます。さすがに久美も疲れ果てております。お殿様、今夜は、ご勘弁を。それを聞いた主計は何も言わずに部屋を出て行きます。程なくして刀を手にした主計が戻ってまいります。久美を揺り起こし、無言のまま久美を斬り捨てます。すでに主計は狂っていたのでしょか、その場に呆然と立ちすくんでおります。

物音を聞きつけた腰元がやって参ります。
久美様、久美様、どうかいたしましたか？　恐れ入りますが部屋に入らせていただきます。
腰元の叫び声により数名の家人が部屋に入ります。そこにいるのは、血が滴る刀を持ったままの主計と、無残に切り殺された久美でありました。
主計は、ハッと正気に戻り、自らが犯した事実に気が付いたのでございます。なんて事を！　家老とは言え、理由もなく妻を殺すことは許されません。主計は、叫びます。
「久美めが、白状しおった。数衛門と逢っておったとな。許す事は出来ん、

Copyright © H.Mitani

不義密通じゃ！　久美は、わしが斬った。数衛門を成敗せよっ！」

身に覚えのない不義密通。家老の命を受けた討手（うって）たちが数衛門に斬りかかりますが、右上一刀流には適うはずもございません。何人もの討手がやってまいりますが結果は同じでございます。数衛門に申し開きの機会を与えられるはずもございません。止む無く襲ってくる討手を斬りますが、なんの罪もない者たちでございます。数衛門は、ある夜、藩を捨て旅立ったのでございます。

これがこの世の出来事か、なんと理不尽なものか。愚かな人間の猜疑心から久美殿が殺され、討手となった自分の友と刃を交えなければならない。刀を抜き対すれば、友であっても刀は何の躊躇（ためらい）もなく相手を斬ってしまう。自分の意志とはかけ離れた所作が自然とでてしまう。

旅には出たものの討手は執拗に追ってまいります。何人の友を斬ったであろうか。私は人を信じすぎた。身を綺麗に毎日を過ごせば人に迷惑は掛けないと思っていた。ましてや、自分に災いなど降り掛かるとは思ってもいなかった。もうご免である。

これからは、降り掛かってきた火の粉は、どのような小さなものでも、まず消すことにしよう。そのために人を斬っても構わない。一人を斬るだけで済むではないか。

すでに路銀もなくなり、野宿の連続でございます。柿の木を見つければ柿を取りむさぼり喰う、野鼠が走れば小柄（こづか）で仕留め火に炙（あぶ）って喰う、お地蔵さんに供えられた握り飯を喰う。すでにお乞食と同じでございます。このような状態でも、討手と対しますと刀は信じられない程の鋭い動きを見せます。数衛門自身、このような自分が判らなくなっております。

どうすれば良いのじゃ。これから自分はどうなっていくのだろうか。

Copyright © H.Mitani

薄が原をトボトボと歩いております。この薄が原は、甲津藩の領地。諸国を放浪しておりましたが、いつしか戻ってしまったのでございます。しかし、数衛門は気が付いておりません。

何故、障子だけが綺麗なのであろうか？　人気は全く感じません。

数衛門は、障子を眺めながら、ただジッとしておりました。

その時、障子にボーと灯りが映りました。誰かが火を燈したのでございます。誰かが居る。数衛門は驚きます。剣の道を極めた者は、殺気だけでなく人の気配を感じ取る研ぎ澄まされた感性を持っているものでございます。さっきまでは気配など全く気配を感じなかったのでございます。

しばし、呆然と明るくなった障子を眺めておりますと影が映ります。すっきりとした女性の影。髷もきちんと結い上げ、身のこなしも優雅な動きでございます。数衛門は、ただ見つめているだけでございます。

影が障子の前で小さくなりました。影が障子に近づき座ったようでございます。そして、静かに障子が動いたのでございます。

数衛門が見たのは、三つ指をつき、頭を下げている女でございました。

女が静かに頭をあげます。

「数衛門様、ようこそ」

数衛門が見たのは、美しい面持ちの久美でございました。

久美殿！　数衛門は、言葉が出ません。久美殿は、主計に殺されたはず。ということは……。

数衛門は、この時、総てを理解いたしました。

「数衛門様、お久しぶりでございます。このようにお話しできるのは何年

Copyright © H.Mitani

振りでございましょうか。やっと二人になれました。どうされたのですか？　そんなにビックリされたお顔をして……」

しかし、余りにも美しく幸せそうな面持ちの久美でございます。

数衛門の感動は、計り知れないほど大きなものでございました。身動きなど出来ようはずがございません。ただ、呆然と立ちすくんでいるだけでございます。

「数衛門様、お風邪をおひきになりますよ。さっ、中へお入りくださいませ。久美は、お待ちしておりました。夕餉（ゆうげ）も用意してございますよ」

数衛門は、久美がこの世のものではないことを既に悟っております。

何故、この様に幸せそうな久美殿であるのだろうか？　全く事実無根な理由により殺されたのではないか。僅（わず）かでも恨みがあれば、このような表情にはならないはず。

数衛門は相変わらず、ただ呆然と立ちすくんでいるだけでございます。

「オホホ、何を不思議がっていらっしゃるのですか？　久美は、今、幸せでございますよ。中にお入りくださいませ。お話をいたしませんか？」

数衛門は考えます。所詮、理不尽なこの世。何が起こるか判らないが、久美殿の話を聞いても良いのでなかろうか。それに、この幸せそうな面持ちは余りにも美しすぎる。久美殿と、しばし過ごしても良いのではないだろうか。

数衛門は、この世とあの世の境目とも思える綺麗な障子の中に入ることにいたします。

傾きかけた家のはずですが、障子の中に入り数衛門は驚きます。なんと綺麗な部屋であることか。これが、あの世なのであろうか？

広い部屋。揺らめく蝋燭（ろうそく）の炎。あの壊れかけた家は、どこに行ってしまったのだろうか。

Copyright © H.Mitani

久美は、数衛門を暖かい湯気の立ち上がった風呂場へと導きます。数衛門は垢だらけの体を洗い、月代を剃り髷を整えます。用意された着物を着ます。着流しの姿は、以前の凛々しい数衛門の姿そのものでございます。数衛門を見た久美は、ぽっと頬を赤らめます。

すっかり夕餉の用意が整った部屋。ひときわ明るく蝋燭が燈る部屋であります。床の間の前には数衛門の席が、そして、その側に久美が座ります。久美の他に人影はございません。海の幸、山の幸。夕餉は数衛門が味わったことのないものばかりでございました。久しぶりのお酒に二人の話も弾みます。

「久美殿、つまらない噂とは言え、申し訳のない事態を招いてしまいました。私もお詫びしなければと思っておりました」

「何をおっしゃいますの数衛門様。世の中とはこのようなものでございます。好きなお方と一緒になれるなど、所詮無理なことでございます。決めるのは家と家でございます。町人であればまだしも、武士の家に生まれた者には自分の意志などないのと同じでございます。主計様と夫婦(めおと)になりましたが、私にとりましては、お仕事と同じでございました。何の感情も抱きませんでした。思うお方は心に秘めておりましたが、久美はそれだけで良いと思っておりました。数衛門様は都筑家のご次男、久美には兄上がおります。小さい頃から判っておりました。決して一緒にはなれないと」

「久美殿っ……」

久美は、初めて数衛門に自分の思いを伝えたのでございます。

「三年ほど前の事でしたか、主計様が唐突に久美に聞きました。数衛門様と逢っているのか、と。何故、そのような事をお聞きになるのか久美には判りませんでした。腰元に聞きますと数衛門様と私の事が噂になっているとの事でございました。お逢いすることなどなかったのにも関わらず噂になっている。久美は、嬉しゅうございました。本当に夢かと思うほど嬉し

Copyright © H.Mitani

ゆうございました。噂だけでも良い、数衛門様と一緒になれたとのだと。
でも、これは自分勝手な喜びだと気が付きました。数衛門様にご迷惑が掛かっているのでは、と心が痛みました。腰元が言いますのには、数衛門様はいろいろなお話がおありになるのに、全く耳をお貸しになられていないと。久美は、もしかして、と考えた途端、胸がときめいてしまいました。はしたない事とは思いましたが、胸のときめきは治まりませんでした」
「久美殿、私も……」
「数衛門様、何もおっしゃらないでくださいませ。今はこうして二人きり。久美は幸せです。久美が斬られたことを気になさっているようでございますね……。久美が主計様を恨んでいるとお考えですね……。ホホホ、まったく逆でございます。主計様が狂ったように久美にお聞きになるたびに久美の喜びは大きくなっていったのでございます。主計様には何の感情も起きませんでした。久美を責める主計様を嫌いになることもございませんでした。刀を持って部屋に入ってこられました。久美は斬られると思いました。恐くはありませんでした。むしろこの世にお別れできると、ほっといたしました。自ら命を絶つつもりはございませんでしたので。幼い頃から、流れに身を任せようと考えておりましたから。数衛門様、さっ、もう少しお呑みになってくださいませ」

久しぶりのお酒が二人を饒舌にいたします。幼い頃、近くの小川で遊んだことや野に咲く綺麗な花を手折ることなく、二人で見つめていたこと。蛇が蛙を呑み込むのを、仕方がないね、蛙を助けたら蛇が困るしね、と手をつなぎながらながめていたことなどを語り合ったのでございます。
数衛門は、久美が自分と同じ考えを持っている事を改めて知ったのでございます。流れに身を任せ、在るがままの自分を、自然を受け入れる。
自分の刀も同じなのだろうか？　友とは言え斬らざるを得ないのも流れの一つなのだろうか？
この夜、二人は初めて寝屋を共にいたしました。

Copyright © H.Mitani

「お目覚めですか、数衛門様」
「あっ、久美殿、寝過ごしてしまったようです」
「あら、何かご予定でもおありなのですか？」
「いや、何もない」
「ホホホ、では寝過ごしたのではございませんね。かなりお疲れのご様子でした。今は、お顔のご様子もよろしいですよ」
「久美殿は、お休みにはならなかったのですか」
「ホホホ、数衛門様、そのようなことはお気になさらないでくださいませ。久美は、この通り元気ですよ」
頬をほんのり赤く染めた久美は、会話はこそ弾みますが数衛門の顔を見る事ができません。昨夜の喜びが思い出され、顔を合わせるのが気恥ずかしいのでございます。
二人きりの楽しい生活が始まり、そして続いていくのでございます。

この屋敷には大きな中庭がございます。中庭は常に春の陽気……。朝、昼、夜と一日が過ぎていくのを知ることができますが、すでに何年が過ぎ去ったのか、数衛門には判らなくなっております。暖かな中庭を二人で語り合いながら散歩をすることもございます。
数衛門は、ふと思い出したように障子の外に出てみることがございます。中庭は昼間でも、外はいつも枯れた薄が続き、寒空に三日月とたくさんの星が掛かっております。そして冷たい風が薄を揺り動かしております。
「久美殿、外を歩いてみませんか。薄の穂が風に揺れ、なかなか風情ある景色です」
「数衛門様、私は寒さが苦手でございます。それに久美は外には……」
久美は、顔をそむけ部屋の奥へといってしまうのでございます。
「久美殿、今日の夕餉は数衛門がお作りいたそう。いつも久美殿では申し訳がない」

Copyright © H.Mitani

「数衛門様、久美と呼んでくださいませんか。二人は夫婦ではなのですか？　久美と呼んでくださいまし」
数衛門は、下を向き何も言えず奥へといってしまいます。数衛門は、どんなに久美との暮らしが楽しいものであっても、久美がこの世のものでないことが頭から離れません。

数日後、数衛門は薄が原を歩いてみたくなったのでございます。
障子を開け、外に出ようといたしました。どうしたのでございましょうか、障子の外に出ることができません。金縛りにあったように体が動かないのでございます。外に出られない……　と、いうことは……
数衛門は総てを悟ったのでございます。
「久美っ、久美っ。久美、こちらに来てくれぬかっ！」

久美は、数衛門の大声に驚き、飛んでまいります。

「数衛門様、今っ、今、久美とお呼びになりました。久美と……」
「いかにも。久美。二人は晴れて夫婦ぞっ。これからも久美を大切にいたす。二人に降り掛かるどのような小さな火の粉でも私は許さん。二人はいつまでも一緒ぞっ！」

何年が過ぎ去ったのでございましょうか、この薄が原に、大きな看板が立てられたのでございます。

「ススキ野宅地造成地　来春発売開始　横田建設」

ブルドーザーが、うなりを上げ、土を掘り起こしています。
この辺一帯は、あの横田主計の末裔、横田家が古くから所有しておりま

Copyright © H.Mitani

す。十数年前までは誰も見向きをしなかった薄が原でございましたが、近くに鉄道が通り、一躍脚光をあびだしたのでございます。

現場監督が、掘り起こした土の中に一体の人骨を見つけます。丁度、あの綺麗な障子の家があった場所でございます。早速、社長の横田に連絡いたします。

「社長、人骨がでましたが……。警察に連絡しましょう」
「ちょっと待て。どんな骨だ」
「見た目は、がっしりとした骨です。多分、男でしょう。しかし、かなり古いようです。強く掴むとボロボロと欠けていきます」
「そうか。かなり古いか。構わん。粉々に砕き、土に混ぜてしまえば判らんだろう」
「しかし、社長。それは……」
「構わんと言っているだろう。どうせ、大昔に行き倒れた者の骨だ。言う通りにしろっ」

人骨が掘り起こされた場合、警察に連絡しなければなりません。横田は調査などで工事が遅れるのを懸念したのでございます。

現場監督は骨を砕きます。さすがに気が咎(とが)めるのか、酒を掛け、線香をたて手を合わせます。そして仕方なく土に戻したのでございます。

閑静な高級住宅街ができあがります。贅を凝らした邸宅が連なります。どの邸宅の庭にも薄が植えられています。秋になりますと綺麗な穂が風に揺れております。

横田も、この高級住宅街に邸宅を構えたのでございます。ひときわ目立つ大邸宅は、まるでこの一帯の支配者であるかのような威容を誇っております。人骨を砕き捨て去ったことなど、すっかり忘れております。

Copyright © H.Mitani

ある日、なかなか部屋から出てこない横田を不審に思い、女中がドアをノックします。答えがありません。ドアには鍵が掛かっておりますので家族に知らせます。

部屋の中を見た家族は、その場で気を失ってしまったのでございます。余りにも凄惨なものを見てしまったのでございます。

部屋には、左の首筋から右側の腰まで袈裟懸けに両断された横田の死体が転がっていたのでございます。

どんな些細な火の粉でも降り掛かれば、容赦はしない……

まさか、あの数衛門が……

Copyright © H.Mitani

編集・発行者　エムツー・プラデオ
三　谷　弘

二〇〇六年二月十四日

禁無断転載・複写

Copyright © H.Mitani